

# 大学授業における WOWW アプローチ実践の試み — 学生の感想をもとに —

(愛媛大学教育学部教育心理学教室) 相模 健人

## An education practice by using Solution Focused Approach — WOWW (Working On What Works) Approach - in class.

The assessment on the based of students' feedbacks

Takehito SAGAMI

(平成 21 年 6 月 5 日受理)

### I. はじめに

筆者らはこれまで Solution-Focused Approach の質問技法である スケーリング・クエスチョン (Scaling Question) を用いた授業研究を多く行ってきた (相模, 2003a, 2003b) <sup>(5, 6)</sup> (相模・渡部, 2004a, 2004b) <sup>(7, 8)</sup> (相模・田中・菅・河合・友寄, 2005) <sup>(9)</sup> (相模・小嶋・松本, 2006) <sup>(10)</sup> (相模・吉野・田中, 2007) <sup>(11)</sup>。スケーリング・クエスチョンとはカウンセリングの面接内で「1 があなたが最初にここにこられたとき, 10 がもう一人で何とかやっていけるときとすると, 今はいくつですか?」と尋ねるように、「クライアントの観察, 印象, 予測などを 1 から 10 の尺度に置き換える」(de Jong, P., Berg, I.K., 2007) <sup>(3)</sup> 質問である。その中で学生の意見を参考にしながら, 授業を改善することで学生の授業理解が深まることが確認された。

近年, Solution-Focused Approach の考えを用いて, 学校現場に介入する手法として WOWW (Working On What Works うまく行っていることに取り組む) アプローチが注目されている。WOWW アプローチは Berg, I. K., Shilts, L. (2005) <sup>(2)</sup> によると「クラスの教育の質に影響を与えるよう設計された革新的なプログラム」であり, 教室のさまざまな改善に用いられている。WOWW アプローチが導入された中学校長が「ポジティブな強化と解決を基本とした焦点化を用いる協同作業は教育であれビジネスの場であれどんな場面でもうまくいくことでしょう」(Berg, I.K., Shilts, L., 2005) <sup>(2)</sup> と述べるほど,

学校現場での効果は見られるが, その実証についてはこれからの段階であるといえよう。

わが国では WOWW アプローチの学校現場への導入はほとんど見られないのが現状であり, この手法についての応用が大いに期待されるところである。

そこで本研究では筆者が行う大学の授業において, WOWW アプローチを実践し, その導入の意義に関する学生の意見について KJ 法 (川喜多, 1967) <sup>(4)</sup> を用いて整理し, その意義について考えることを目的とする。WOWW アプローチではさまざまな手法があるが, 本研究ではこの中の「クラスの成功スケール」をもとに, 学生が受講態度について目標を定め, それにどれだけ近づいているところをティーチング・アシスタントがコメント (ほめる・ねぎらう) してフィードバックし, それを聞いた学生が受講態度について スケーリング・クエスチョンに答える手法をとった。ここでコメントとは「クライアントが語り, 感じ, そして信じていることをセラピストが承認し, そしてセラピストとクライアントとを結び付けている多様な問題に対して彼らが示している態度を肯定し, 敬意を表すプロセスである」(Berg, I.K., 1994) <sup>(1)</sup> と定義され, カウンセリング内でクライアントをほめ, ねぎらう場合に使われる技法である。

### II. 方法

#### 1. 授業について (平成 20 年度前期)

- ①授業名：教育相談論（授業者：相模健人）
- ②授業時間：月曜 4 時限（午後 2 時50分～ 4 時20分）  
に行った。
- ③授業期間：平成17年 4 月14日～ 7 月21日に行った。  
全14回である。
- ④受講登録者数：教育学部教員養成課程の学生を対象とし、登録者数は129名であった。
- ⑤講義教室：教育学部大講義室で行った。
- ⑥授業内容：授業内容は授業者のスクールカウンセラーとしての経験を生かし、システムズアプローチ、Solution-Focused Approachを用いたスクールカウンセリングを主に取り扱った。授業形式は講義形式で14回行った。なお、WOWWアプローチについて第10回授業において紹介している。

授業はマイク、ビデオ、プロジェクターといった視聴

覚機材を必要に応じて用いた。

## 2. 授業目標の設定について

WOWWアプローチを行うにあたって、学生に授業態度についての目標設定をするために授業初回において「第1回講義アンケート」を行った。その中で「この講義で『わざわざ講義をうけたかがあった』と思えることが実現したら、あなたはどんな態度で授業を受けていますか？具体的、現実的にお書き下さい」と学生に授業態度について書いてもらった。それを筆者がKJ法を用いてまとめたものがFig. 1であり、この結果の「講義内では」、「講義外では」の島のそれぞれの詳細がFig. 2, 3である。この授業目標については学生に配ったり、授業毎にプロジェクターで見せ、この授業態度を目指していけるよう周知徹底を図った。

### 無遅刻、無欠席、寝ない

無遅刻、無欠席はもちろん、居眠りもしません。	もし、ねむくなったら大学までいかせてくれた親への感謝の気持ちを思い起こし、がんばって目をあける！
------------------------	--------------------------------------------------

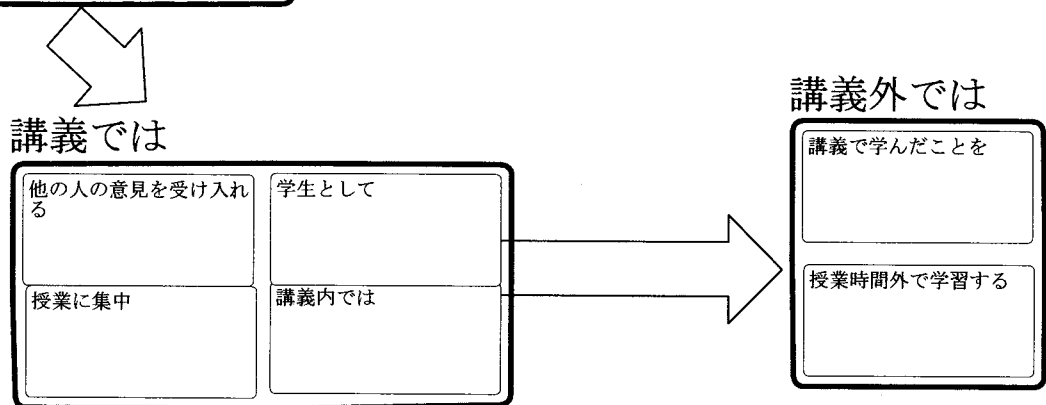


Fig. 1 第1回講義アンケートによる授業態度に関する目標

講義では

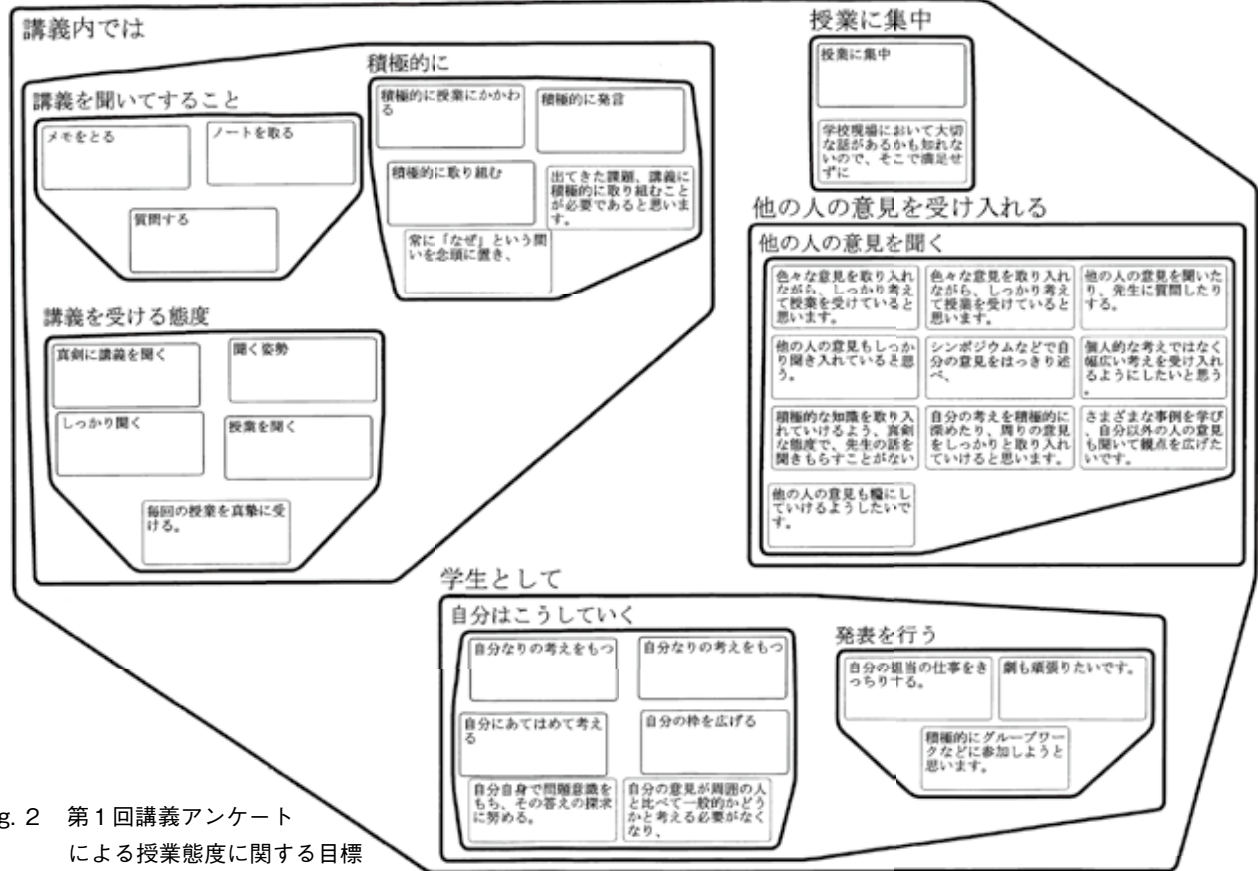


Fig. 2 第1回講義アンケートによる授業態度に関する目標  
講義では

講義外では

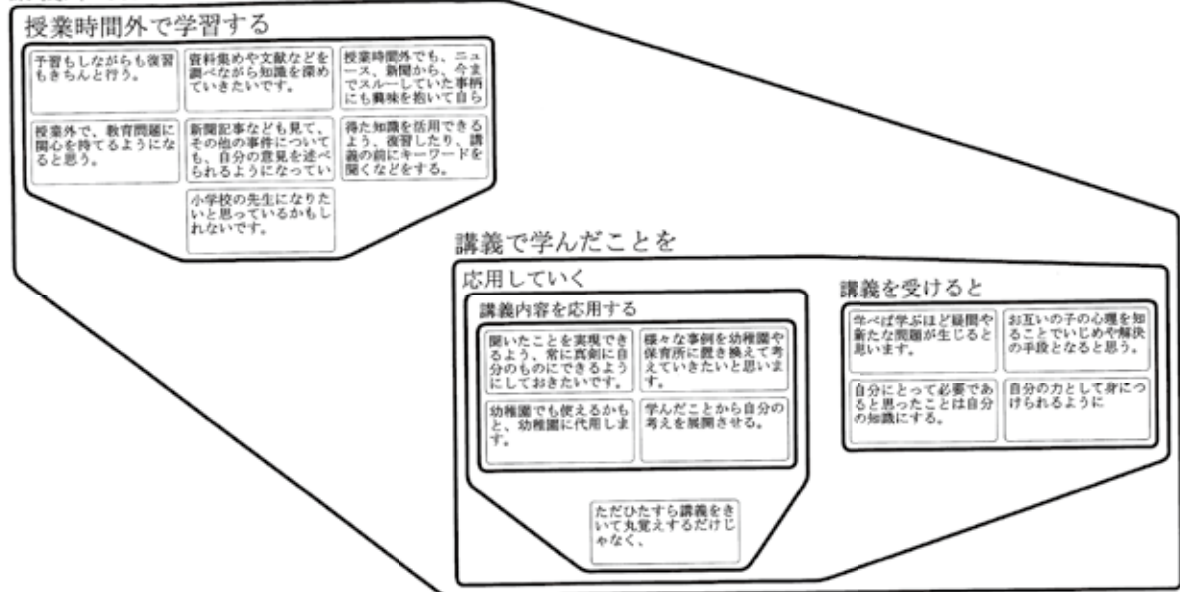


Fig. 3 第1回講義アンケートによる授業態度に関する目標 講義外では

WOWWアプローチ作成用紙

月 日 ( ) 限 教育相談論

1. 授業態度に近付いていたところ (個人)

- ・ ( ) が
- ・ ( ) が
- ・ ( ) が
- ・ ( ) が
- ・ ( ) が

2. 授業態度に近付いていたところ (全体)

- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

3. それ以外でも授業内でよかったところ (個人)

- ・ ( ) が
- ・ ( ) が
- ・ ( ) が
- ・ ( ) が

4. それ以外でも授業内でよかったところ (全体)

- ・
- ・
- ・
- ・

5. その結果、授業はどんな感じで進んだか？

- ・
- ・
- ・
- ・

6. 今日の授業のよかったところを続けるにはどうすることが必要か？

- ・
- ・
- ・
- ・

資料1 WOWWアプローチ作成用紙

### 3. WOWWアプローチについて

WOWWアプローチの実施については、2. で作成した授業目標に基づき、ティーチング・アシスタント（以下TA）3名が交代で担当した。TAはSolution-Focused Approachについて学ぶ大学院生である。TAは授業を観察し、作成した「WOWWアプローチ作成用紙」（資料1参照）に記入し、授業の最後に時間を3～5分程度、TAから学生にコンプリメントを中心としたフィードバックを行った。それに基づき学生は「授業評価シート」に「今日の授業態度は目標と照らし合わせて、1を『かけ離れている』、10を『目標が達成されている』とするといくつでしたか?」といったスケーリング・クエスチョンに答えることにより、授業態度の自己評価を行った。

### 4. 学生の意見について

授業最終回において「最終授業評価シート」において、質問A「この授業全体を1を『分かりにくい難しかった』、10を『分かりやすい、理解できた』とするといくつになるでしょうか?」、質問B「この授業全体の授業態度は目標と照らし合わせて、1を『かけ離れている』、10を『目標が達成されている』とするといくつでしたか?」、質問C「授業内で行われたWOWWアプローチ（TAさんが授業内のよかったことを話すこと）はあなたの授業態度を改善することにどう役立ちましたか?また

WOWWアプローチの感想をお書き下さい」の質問を行い、WOWWアプローチに関する意見を尋ねている。

### 5. 結果の整理

「最終授業評価シート」で得られた質問C「授業内で行われたWOWWアプローチ（TAさんが授業内のよかったことを話すこと）はあなたの授業態度を改善することにどう役立ちましたか?またWOWWアプローチの感想をお書き下さい」の学生の意見についてKJ法を用いて整理し、結果図を作成した。その文章化を考察とする。

## Ⅲ. 結果

学生のWOWWアプローチに関する意見についてKJ法を用いてまとめたものがFig. 4であり、それぞれの島の詳細がFig. 5～9になる。KJ法内の学生の意見にある括弧内の数字はそれぞれ「最終授業評価シート」における、質問A「この授業全体を1を『分かりにくい難しかった』、10を『分かりやすい、理解できた』とするといくつになるでしょうか?」、質問B「この授業全体の授業態度は目標と照らし合わせて、1を『かけ離れている』、10を『目標が達成されている』とするといくつでしたか?」の回答の数値である。以下、考察においても同様である。また結果図では学生の意見を必要に応じて切片化して用いている。また結果図の文章は学

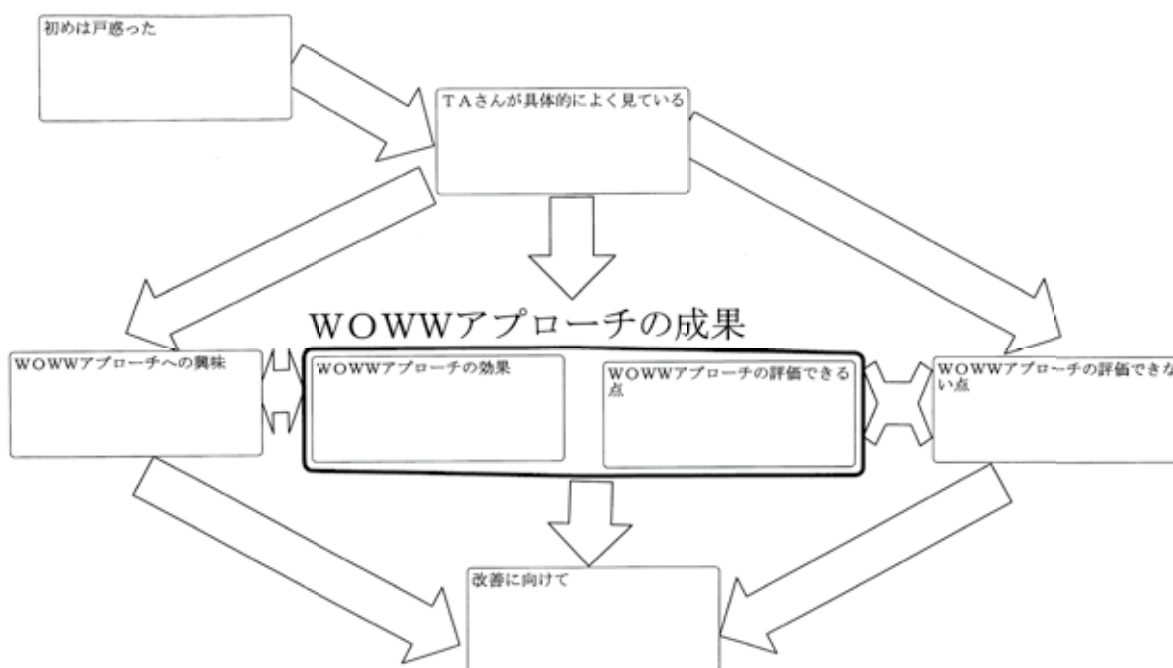


Fig. 4 WOWWアプローチの感想 KJ法結果 全体図

生の意見をかな使いも含めそのまま用いている。

#### IV. 考察

KJ法の文章化を主に考察として進めていく。

KJ法全体の結果としては、Fig. 4 のようになった。島はそれぞれ「初めは戸惑った」、「TAさんが具体的によく見ている」、「WOWWアプローチへの興味」、「WOWWアプローチの成果」、「WOWWアプローチの評価できない点」、「改善に向けて」に分かれた。順に見ていこう。

「初めは戸惑った」の島においては、「始めは何をしているかよく分からなかったけど、話を聞くとそういうことだったのかと思い、納得できた。(8, 8)」などの意見があり、WOWWアプローチ導入当初は、これまで経験のない授業形式であったため、戸惑いがあったと考えられる。

この島と因果関係のある「TAさんが具体的によく見ている」の島は「TAさんがよく観察している」と「具体的に言ってくれた」の島に分かれている(Fig. 5 参照)。「TAさんがよく観察している」では、「TAさんは細かいところまでよく観察できていたように感じた。(7, 7)」や「TAさんはとてもよく私たちのことを観察していて、

いいところを見つけるのがうまいな、と感動した。(10, 10)」といった意見があり、TAが目標に沿ってよくみていることが学生の戸惑いをほぐしていくのに役立ったと考えられる。

さらにこの島と相関関係にある「具体的に言ってくれた」では、「どういう授業の受け方がよかったのかを説明してくださったので、次の授業でどういう風に受けていくのか手本になり役立ったと思う」、「よく授業に取り組んでいた人たちの座席を具体的に示されることで、自分ではできてなかったなあと実感できたので良かったです。(7, 7)」とTAが目標に合致した授業態度やその学生の席の位置などを特定してコメントすることで、学生に授業態度について振り返る機会になっていたと考える。コメントされた学生も「やっぱり自分のこと言ってくれると嬉しいと思う。(7, 8)」と喜び、周辺の学生も「具体的に席の位置を述べてほめていたのは言われた人達はうれしかったのではないかと思います。(8, 9)」とそれを認めている。

さらに「具体的な授業態度を聞くことで授業中にはどのような態度でのぞむべきか改めて考え、次回の授業態度の目標が立てやすい。(9, 10)」、「具体的にどこが良かったか、どの辺りの人が頑張っていたか伝えてくれ

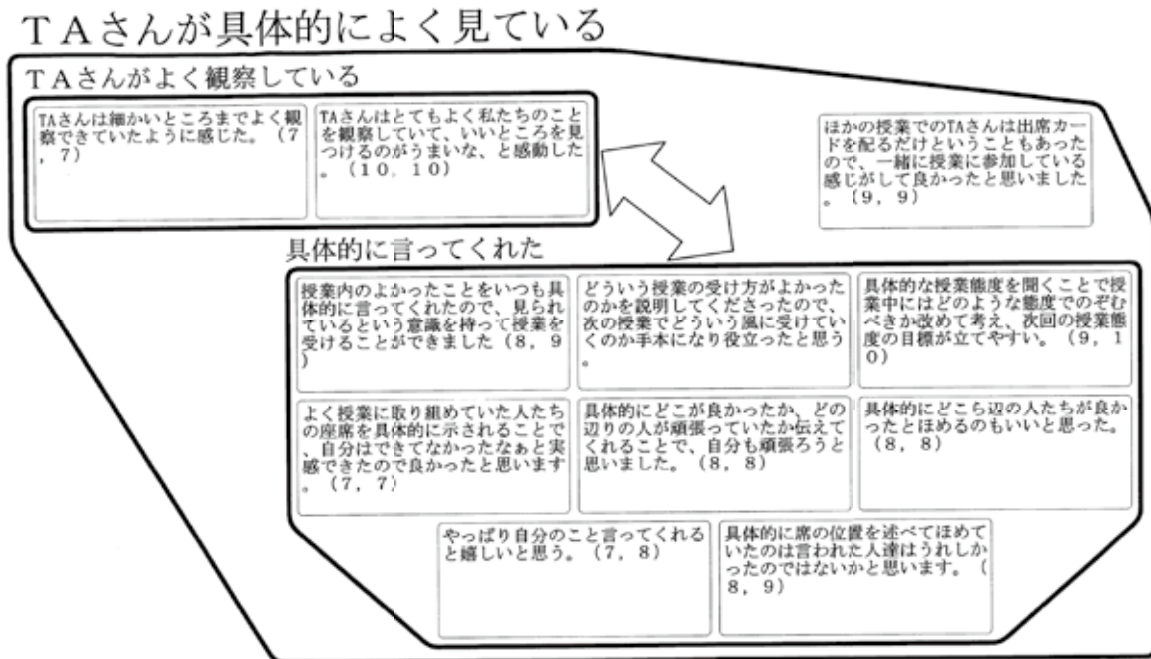


Fig. 5 WOWWアプローチ KJ法の結果 TAさんが具体的によく見ている

## WOWWアプローチへの興味

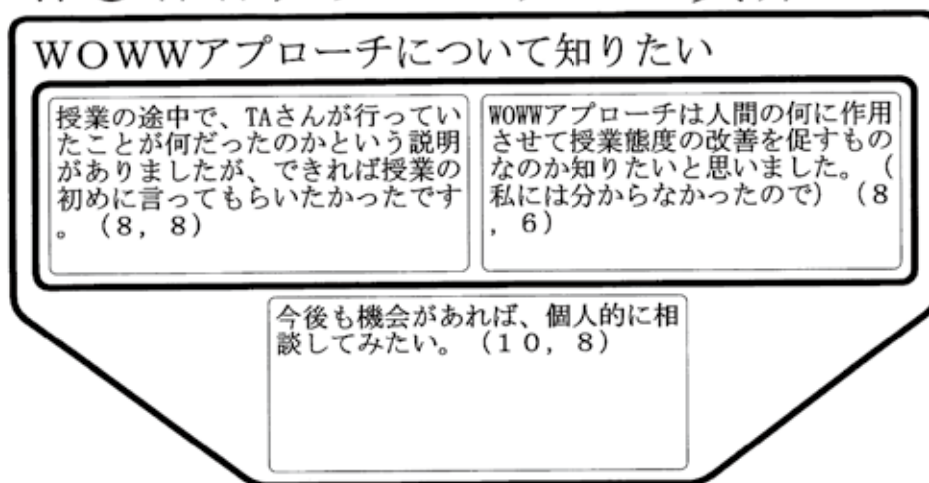


Fig. 6 WOWWアプローチ K J法の結果 WOWWアプローチへの興味

ることで、自分も頑張ろうと思いました。(8, 8)」と言った意見もあり、次回への受講動機を高め、授業態度についての目標も設置しやすかったと考える。

さらには、「ほかの授業でのTAさんは出席カードを配るだけということもあったので、一緒に授業に参加している感じがして良かったと思いました。(9, 9)」とTAの利用に対する積極的な評価もあった。

このようにTAが具体的な手法を用いていることが、WOWWアプローチへの戸惑いを払拭させ、「WOWWアプローチへの興味」、「WOWWアプローチの成果」、「WOWWアプローチの評価できない点」といった具体的な評価に影響を及ぼしていると考えられる。

「WOWWアプローチへの興味」の結果はFig. 6のようになる。「WOWWアプローチについて知りたい」の島では、「授業の途中で、TAさんが行っていたことが何だったのかという説明がありました。できれば授業の初めに言ってもらいたかったです。(8, 8)」や「WOWWアプローチは人間の何に作用させて授業態度の改善を促すものなのか知りたいと思いました。(8, 6)」といったWOWWアプローチに対しての興味を学生が持っていることが分かる。また、「今後も機会があれば、個人的に相談してみたい。(10, 8)」と学生がこれから教職を目指すに参考にしたい意見も見られた。

次に「WOWWアプローチの成果」の島は、「ほめら

れてよかったこと」、「見られていることで授業が引き締まる」、「授業態度のよいところが分かった」、「自分の授業態度の反省、改善」に分かれている (Fig. 7 参照)。

「ほめられてよかったこと」の島ではまず「ほめられてうれしい」の島があり、「いつもほめていただいたので、気持ちよかった (10, 9)」、「よい所を話してもらえことはうれしかった。(10, 9)」といったほめられてうれしかったという意見が占め、「よかったことのみを言ってくれたので、すごく気持ちよく授業を終わらすことができたので、すごく効果的だと思う。(8, 9)」といった授業後の感想が「授業態度の悪いところよりも、良いところを中心にお話ししてくださったので、やる気が減退することはありませんでした。(6, 6)」といった授業意欲の維持に結びついている。さらには、「人間は褒められることによって心の中では喜びを感じ、さらに褒められたいと思い頑張る。(9, 9)」とWOWWアプローチの狙いに関しても理解されているようである。

また自分のことでなくても、「ほめられることがよい」の島では、「自分があまり積極的に授業参加をしてなかった時に、他の人であっても良い点をほめられていると、頑張らないといけないと思うことができました。(9, 9)」、「自分の事でないにしても、誰かからほめられて授業が終わると嬉しい(後味がよい)。(8, 8)」といった意見があり、授業内で学生をコンプリメントする場面

WOWWアプローチの効果

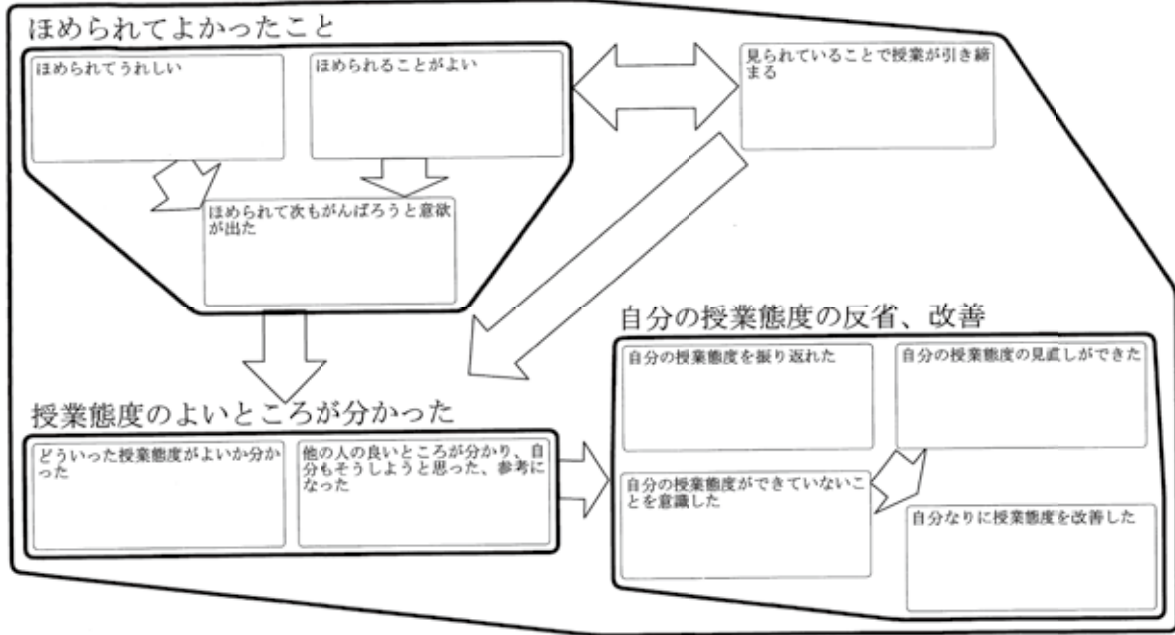


Fig. 7 WOWWアプローチ KJ法の結果 WOWWアプローチの効果

があることを評価している。

このようなことから「ほめられて次もがんばろうと意欲が出た」の島に繋がり、授業意欲の向上に結びつくと考えられる。この島では「ほめられることはやはり嬉しく、次の授業も頑張ろうと思えるきっかけになったのでとても良かったと思う。(8, 8)」, 「良かったことを聞くことで『今日もがんばれたし、次もがんばろう』という気持ちを持つことができました。(9, 9)」, 「TAさんに良いところを言っていただいたら、次は自分もあししよう、とかこんなところは続けていこう、というように授業態度を改善する意欲が出てきます。(9, 8)」といった意見が多く、学生の授業態度をコンプリメントすることで、よかった授業態度について継続していこうという意思が見られる。

このように「ほめられてよかったこと」では学生の授業態度をコンプリメントすることの効果十分に認められ、このことがWOWWアプローチの効果の一つと言える。

他方、この島と相互関係があるのが「見られていることで授業が引き締まる」の島である。「見られていると

思うと気が引き締まると思う。(9, 9)」, 「TAの方が授業を観察してくれているおかげで授業が引き締まっていたことに役立っていたと思う。(8, 8)」といったTAが授業を観察していることの結果が現れている。これは「自分の態度を見られると思うと、やはり寝るのを控えようと思う。(7, 7)」, 「自分の態度を見られると思うと、やはり寝るのを控えようと思う。(7, 7)」といった自らの態度を律することからは始まり、それが「授業中話している人もTAさんがまわることで静かになったかなと思います。結果、集中できる形になったと思います。(9, 10)」と他の学生も効果を感じて、「『見られている』という意識づけになった。授業を内容ではなく、自分たちの態度から考えることができるので必要だと思う。(7, 8)」, 「観察されているため、いつもより緊張感を持って授業に臨むことができた。(8, 8)」という自らの授業態度を意識するようにつながっていったと考えられる。「初めは戸惑った」の島にあるように、WOWWアプローチはこれまで学生が体験したことのないものであったにも関わらず、このような効果を大学生であっても生み出していることは特筆すべき事柄と考える。



このような「ほめられてよかったこと」、「見られていることで授業が引き締まる」のWOWWアプローチの効果が「授業態度のよいところが分かった」の学生の意識に結びつく。

この島は「どういった授業態度がよいか分かった」と「他の人の良いところが分かり、自分もそうしようと思った、参考になった」の島に分かれている。「どういった授業態度がよいか分かった」では、「授業態度が良い人はどういった人かがわかったので、参考になりました。(8, 8)」, 「授業の最後に第三者から評価を受けることで自分たちの態度がどのようなものであるかより明確に知ることができた。(9, 8)」, 「自分の評価だけでは分からないことに気づくことができてよかったです。(8, 8)」といったTAからのコンプリメントにより、自分たちの授業態度の具体的なよい点に気づくことが出来る。特に「特に私は前の方の席に座っていて、後ろの人が見えないけれど、その授業時の様子を話してくれることで、全体的にしまりがあったと思う。(7, 8)」, 「教室全体を見ていただいていたので、指摘された点はとても的確だったように思いました。(8, 9)」といった教室全体での評価が学生には役立つようである。そうすることで「受けっぱなしではなく、その日の授業を振り返ることは大切だと思う。(8, 8)」, 「授業の雰囲気というあいまいなものを具体的にどのような状況にあるか知ることが出来、非常によかったと思う。(8, 9)」といった意見も出てきている。

「他の人の良いところが分かり、自分もそうしようと思った、参考になった」の島では、「他の人の良かったところをきくと、私も負けずにもっとやらないと！と思えてやる気が出せて良かったです。(8, 8)」, 「よかったことを言ってもらえることで、自分もそうしようと思ったり、いい所をきちんと見てくれてほめてくれることですごくやる気が出た。(8, 7)」, 「良い授業態度を真似て、自分のモチベーションも上げていくことができた。(10, 10)」といった他の人の授業態度をコンプリメントしているのを聞いて、自分もがんばろうという授業動機が上まっていることが分かる。いい意味での競争意識が学生間で出ていると言える。これは「良かったことを言われると、うれしく続けていこうと思ったし、他人の良い点を聞いて自分もそうしようと思うことが多

かった。(8, 8)」, 「他の人がどのように授業を受けているかが分かり、次の授業では自分も気をつけてしようと思うようになった。(8, 8)」, 「他の人はこのようなことを頑張っているのだということを知って、参考になった。(8, 7)」といった学生が他の人のよい授業態度を取り入れていこうとする行動に繋がっている。これは解決が別の解決に結びついていくというRipple Effect (Spiegel, H. & Linn, L. 1969)<sup>(12)</sup> が認められ、授業態度の改善に効果を上げている。

こういった島を経て、最終的に「自分の授業態度の反省、改善」に繋がっていきと考えられる。この島には「自分の授業態度を振り返れた」、「自分の授業態度の見直しができる」、「自分の授業態度ができていないことを意識した」、「自分なりに授業態度を改善した」からなっている。

「自分の授業態度を振り返れた」では、「自分の授業態度で良かったこと、悪かったことを具体的に振り返ることが出来たので良かった。(8, 8)」, 「自分がしていなかったこと、不十分なことがわかって、次の授業の参考になりました。(9, 8)」といった自らの授業態度を振り返ることができ、その中で「自分の授業態度を客観的に振り返ることができ、自分のできたことはこれからも続け、できなかったことはどうしていくか考えることができた。(8, 8)」というSolution-Focused Therapyの考え方に則った授業改善のあり方が出てきている。

「自分の授業態度の見直しができる」では、「自分の授業の反省ができた。(6, 8)」, 「次の授業では何を目標にしようかという意識を高めたと思います。(7, 8)」といった意見があり、自分の授業態度について反省し、次回授業への目標を設定する態度が見られる。

また「自分の授業態度ができていないことを意識した」では、「自分があまりできていないことを、他の人がやっていたからほめていて罪悪感があり、授業態度を改善しようと思いました。(7, 7)」, 「私は何をやってんだと落胆することもあった。(8, 7)」と人によっては後に述べる「悪いところも言ってほしい」ということを言わなくても、自分の授業態度と比べて反省することもあるようである。

そしてこれらの島が「自分なりに授業態度を改善した」の島に繋がり、「普段は真剣に授業を聞くことがあまり

なかったのですが、自分なりに精一杯取り組めた。(10, 8)、「自ら意見を出そうとする態度につながりました。(9, 9)」というWOWWアプローチを行うことにより、自らの授業態度を具体的に改善していることが分かる。

このようにさまざまなWOWWアプローチの効果が認められ、学生の授業態度の改善に役立っていることが分かる。

また「WOWWアプローチの評価できる点」の島では「WOWWアプローチは役立った」、「WOWWアプローチはよい」の島に分かれている。「WOWWアプローチは役立った」の島では「WOWWアプローチについては悪かった点ではなくよかった点を話して下さるので聞こうと思うようになった。(8, 8)」、「助言をして下さり、感謝しています。(9, 10)」、「全員の前で言っていただくので全員に参考になったと思いました。(8, 9)」といった意見があり、WOWWアプローチが学生の授業態度改善に役立っていることが伺える。さらに「WOWWアプローチはよい」の島では「WOWWアプローチは、学習意欲が出るいいものだと思います。(7, 8)」、「WOWWアプローチのようにほめて伸ばすことは大切なことだなと感じました。(8, 8)」、「悪いところを直せと言われるよりは授業を受ける気になった。(9, 9)」といった意見があり、WOWWアプローチについての肯定的な評価が見られ、こういったところが学生に評価さ

れていると考える。

さて、ここからはWOWWアプローチの問題点、改善点について述べていきたい。「WOWWアプローチの評価できない点」の島は「WOWWアプローチは役に立たなかった」、「似たようなことを言っている」、「嫌だった、分からなかったところ」、「聞けなかった、意識しなかった」の島から構成されている (Fig. 8 参照)。

「WOWWアプローチは役に立たなかった」の島では「役立ったという実感は正直あまりない。(7, 4)」、「あまり役に立っていない (2, 4)」、「WOWWアプローチ (授業内のよかったことを話すこと) だけで見ると、改善に役立ったとは思えませんでした。(8, 6)」と授業態度の改善には役立っていない学生も一定数存在する。

その理由として、「似たようなことを言っている」の島では「毎回同じようなことをほめられていたので、途中から慣れてしまったことを反省しています。(7, 7)」、「毎回内容が同じような気がしたので、最後の方はあまりききめを感じなかった。(9, 9)」とTAのコメントがだんだんと似通ったものとなってしまい、今後の改善が求められる。

また、「嫌だった、分からなかったところ」の島では「『左の列の前のグループ』とか名指し、みたいなものが少し嫌だった。(7, 6)」と具体的に学生を示したことに嫌悪を感じた学生や、「『左側の…』と言われた時、どっち

### WOWWアプローチの評価できない点

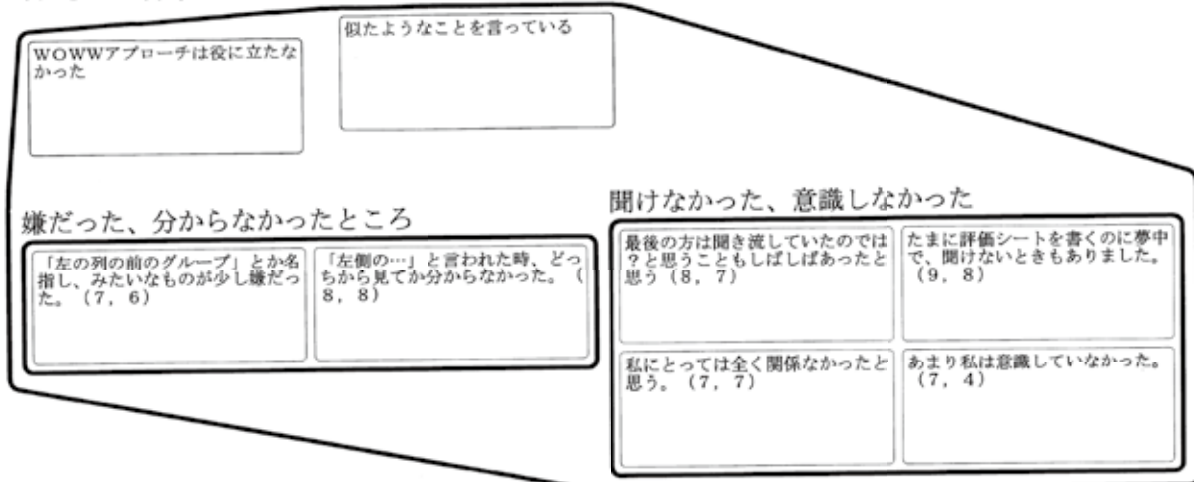


Fig. 8 WOWWアプローチ KJ法の結果 WOWWアプローチの評価できない点

## 改善に向けて

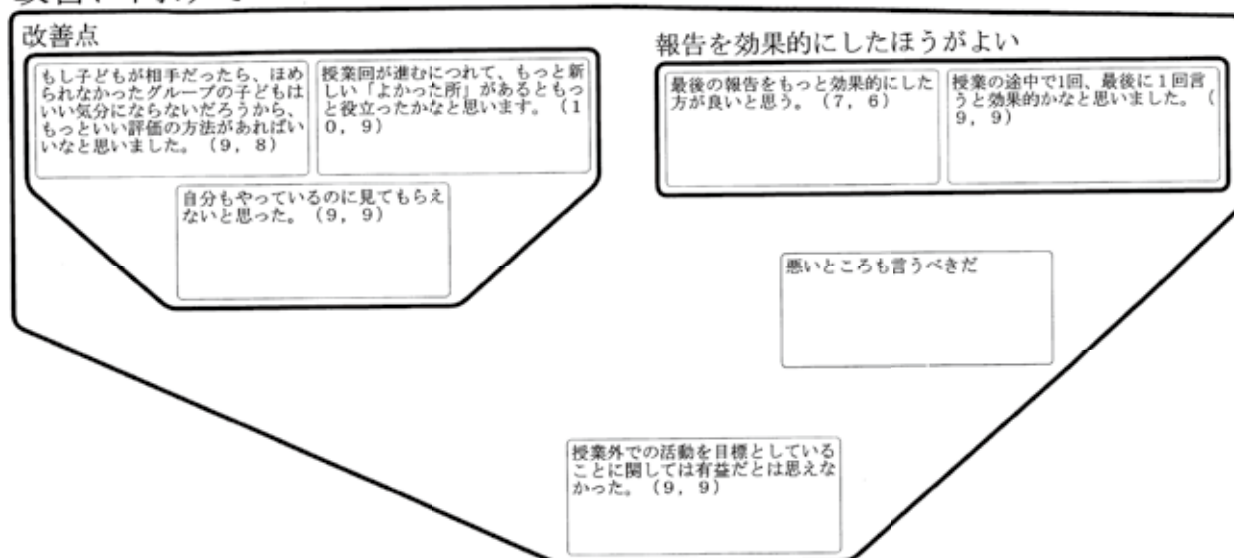


Fig. 9 WOWWアプローチ KJ法の結果 改善に向けて

から見てか分からなかった。(8, 8)」といったコンプリメントが理解できなかった学生が存在する。後者については話しなどを改善する余地があるだろう。

「聞けなかった、意識しなかった」の島では「私にとっては全く関係なかったと思う。(7, 7)」、「あまり私は意識していなかった。(7, 4)」とコンプリメントについて意識しなかった学生と、「最後の方は聞き流していたのでは?と思うこともしばしばあったと思う(8, 7)」、「たまに評価シートを書くのに夢中で、聞けないときもありました。(9, 8)」といった聞き流したり、聞く時間の余裕がない学生がおり、これについてはTAのコンプリメントをより効果的に行う必要がある。

最終的な帰結となる「改善に向けて」の島は「改善点」、「報告を効果的にしたほうがよい」、「悪いところも言うべきだ」から構成されている (Fig. 9 参照)。では「もし子どもが相手だったら、ほめられなかったグループの子どもはいい気分にならないだろうから、もっといい評価の方法があればいいなと思いました。(9, 8)」、「授業回が進むにつれて、もっと新しい『よかった所』があるとちょっと役立ったかなと思います。(10, 9)」といった意見があり、どのように学生全体をコンプリメントするか、またコンプリメントの工夫が求められる。また、「自

分もやっているのに見てもらえないと思った。(9, 9)」といった不満もあり、どのようにTAの観察を行うかも改善すべき点であろう。

「報告を効果的にしたほうがよい」の島では「最後の報告をもっと効果的にした方が良いと思う。(7, 6)」という意見や、「授業の途中で1回、最後に1回言うとう効果的かなと思いました。(9, 9)」と具体的な提案を行う学生もおり、一考に値する点である。

「悪いところも言うべきだ」の島では、「挙げられている内容が褒められた部分ばかりで、悪かった部分については、全体場で紹介がなかった点が気になった。(9, 8)」、「いつも良いところばかり言っていたくのではなく、ダメだと思ったところを注意してもらえてもよかったと思います。(9, 9)」、「私はやっぱり悪いところも言ってもらった方が人は成長するのかなあ…と思っています。(7, 7)」、「どこができていなかったということも報告してくれると私には役立ったのではないかと思います。(9, 9)」といった問題解決的な意見が相次いだ。これについてSolution-Focused Therapyの考え方をを用いてどのように改善していくかが課題であると考ええる。

また、「授業外での活動を目標としていることに関し

ては有益だとは思えなかった。(9, 9)」という意見もあり、これについては目標設定のあり方について改善が必要である。

以上、WOWWアプローチを導入することにより、いくつかの効果があり、大学の授業においても導入する意義はあると考える。しかし、改善点も多くあり、今後、日本の大学生向けのWOWWアプローチを作成していくことが求められる。

## 引用文献

- (1) Berg, I.K. 1994 Family Based Service A Solution-Focused Approach. Norton, New York. 磯貝希久子監訳 1997 家族支援ハンドブック 金剛出版 221.
- (2) Berg, I.K., Shilts, L. 2005 Classroom Solutions: WOWW Approach. BFTC Press, WWW.Brief Therapy.org. ソリューション・ワーカーズ訳 2005 教室での解決 うまくいっていることを見つけよう！ 3,8.
- (3) de Jong, P., Berg, I.K. 2007 Interviewing for Solutions 3rd Edition. Brooks/Cole Publishing Company. 桐田弘江・玉真慎子・住吉祐子訳 2008 解決のための面接技法—ソリューション・フォーカスト・アプローチの手引き— [第3版] 金剛出版 114.
- (4) 川喜田二郎 1967 発想法—創造性開発のために 中央公論社.
- (5) 相模健人 2003a 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その1—解決志向アプローチの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第49巻 第2号 57-77.
- (6) 相模健人 2003b 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その2—解決志向セラピーの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第50巻 第1号 77-84.
- (7) 相模健人・渡部光 2004a 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その3—解決志向セラピーの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第50巻第2号 83-88.
- (8) 相模健人・渡部光 2004b 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その4—解決志向セラピーの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第51巻第1号 71-76.
- (9) 相模健人・田中美紗・菅知絵美・河合美貴・友寄令子 2005 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その5—解決志向アプローチの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第52巻 第1号 101-106.
- (10) 相模健人・小嶋健治・松本円 2006 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その6—解決志向アプローチの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部附属実践総合センター紀要第24巻 117-126.
- (11) 相模健人・吉野飛鳥・田中美紗 2007 スケーリング・クエスチョンを用いた授業研究 その1—授業評価の観点の検討— 愛媛大学教育学部紀要 第I部教育科学 第54巻 第1号 37-41.
- (12) Spiegel, H.. & Linn, L. 1969. The “ripple effect” following adjunct hypnosis in analytic psychotherapy. American Journal of psychiatry. 126. 53-58.